

【月刊】キリスト教書評誌

本のひろば

November
2019

11

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2019年11月1日発行(毎月一回発行)第743号

● 出会う・本・人

真実な言葉を求めて 広田叔弘

● エッセイ

第二七回東北アジア・キリスト者文学会議に参加して

佐藤ゆかり

● 特集「教皇フランシスコ」について学ばなら

この三冊! 有村浩一

● 本・批評と紹介

H・J・クラウク 著 / 住谷 眞訳

EKK新約聖書註解 ヨハネの第二、第三の手紙 三浦 望

青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編

贖罪信仰の社会的影響 藤本 満

森 清著 ひとりでも最後まで自宅で 市川一宏

ジャン・カルヴァン 著 / 関川泰寛 監修、堀江知己 訳

アモス書講義 小友 聡

芳賀 力著 神学の小径IV 石井佑二

服部弘一郎 著 銀幕の中のキリスト教 沼田和也

福田節子 著 50年以上前からあった「心のノート」 角田芳子

山下壮起 著 ヒップホップ・レザレクション 福山裕紀子

広田叔弘 著 詩編を読もう上 小倉義明

近刊情報

書店案内

好評既刊



アウグステイヌス伝

P・ブラウン 著 出村和彦 訳

古代ローマ研究の重鎮ブラウンの処女作であり、現代の古典とも言うべきアウグステイヌス伝。英米圏で『告白録』に次いで読まれているとまで評される。古代最大の思想家の生涯を、その歴史的・地理的環境との関連の中で生き生きと描く。

上巻 ● A5判・336頁・本体3,000円
下巻 ● A5判・326頁・本体3,000円



「アウグステイヌスの母 モニカ」
G・クラーク 著 松崎一平／佐藤真基子／松村康平 訳
なぜ、市井に生きたひとりの女性が、聖人となったのか？
殉教者でも、教師でも、修道者でもなく、『告白録』に母の思い出としてのみ登場する庶民階級のモニカが、なぜ崇敬を集める聖人となったのか。歴史学・考古学・文化史などの視点から古代末期の女性像を再構築し、現代にも共通する普遍的な妻や母という生き方の模範として、その聖人化の過程を考察する。

● A5判・320頁・本体3,400円

好評既刊



本多庸一 信仰と生涯

氣賀健生 著

津軽の自由民権運動で長谷川誠三と出会い、キリスト教の影響を与えた本多庸一の評伝・説教等を収載。

青山学院第二代院長、日本メソヂスト教会初代監督として、草創期の日本キリスト教界を牽引した本多庸一の信仰と生涯を浮き彫りにする！

● A5判 418頁・本体2,800円



長谷川誠三

津軽の先駆者の信仰と事績

岡部一興 著

「敬天愛人」を實踐した篤信の経済人

リング園「敬業社」開設、藤崎銀行創立、牧場経営、鉾山開発など多岐的な事業展開で地方産業を振興した一大事業家でありながら、歴史に埋もれてしまったのはなぜか。弘前女学校を設立してキリスト教教育に注力し、大凶作時には窮民へ米を配布し慰問伝道を行った彼の信仰に学び、知られざる実像に迫る。

● A5判・328頁・本体3,800円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 (出版部)
本のご注文は (e-shop 教文館) へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

shop 教文館



真実な言葉を求めて

— 広田叔弘

礼拝が終って牧師室でガウンを脱ぎます。このとき、強い空しさに襲われることがあります。福音を説き明かした

はずなのですが、言葉に力がないのです。説教者と会衆の間で福音の言葉が魚のように泳いで、正体を見せず消えてしまった気持ちになります。説教者の力量で救いもたらされるわけではありません。承知しています。この中で私は、本当の言葉が欲しいのです。説教者も会衆も、ただ一言、「アーメン」と言える本当の言葉が欲しいのです。

祖父がガンになったのは私が十七歳の時でした。二年間患いました。重篤になったとき祖父の兄が見舞いにやって来ました。祖父は、固くつぶっていた目を開いて、既に言葉はおぼつかなくなっていたのですが、次のように言いました。

「兄貴か？ 俺は、もうダメだ。」

二、三秒の時間を置いて兄が応えました。

「ダメだって言ったっておめえ、ダメだ、ダメだって言いながら、ここまで来ちゃったじゃねえかよお……。」

兄八十歳、弟七十八歳。病床で交わした最期の言葉です。それは、厳しい人生の馳せ場を、眩くことも、恨むこともなく、努力と小さな楽しみを繰り返して正面から生きた人の言葉。私を愛してくれた大切な人の真実な言葉でした。

福音のメッセージを生きなれば救いの訪れは満たされません。肉の体で生きる私たちが、本気になって神と隣人を愛して生きていく。そこで起きる幸いな出来事や喜びがあるでしょう。失敗や挫折、怒りや嘆きの数々があるでしょう。その一つ一つが積もって本当の言葉が生まれるのだと思います。本当の言葉は、福音を生きていく日常生活の中から生み出されるものなのでしょう。これが出来ているなら、何でもない言葉の中にも主キリストの臨在が響くように思うのです。いまだに果たされない、私の課題です。



第一七回東北アジア・キリスト者文学会議に参加して

佐藤ゆかり

二〇一九年八月一日から四日まで、長野県の「恵みシャレー軽井沢」にて、第一七回東北アジア・キリスト者文学会議が開催された。主催は同会議実行委員会、後援は一般財団法人キリスト教文書センター、参加者は韓国側一八名、日本側一五名であった。

主題「キリスト教における文化的受肉(インカルチュレーション)」のもと、初日、歓迎レセプションでは、第一回アジア・キリスト教文学賞授賞式も行われ、岡野絵里子氏(詩人)が受賞された。また、シルヴブレ(柴崎岳史氏、堀江のぞみ氏)の「愛と笑いのパントマイム劇場」は、参加者の一人を招き入れ、演者の指導よろしく、楽しいパントマイムを見せてくださった。なお、二〇一八年七月に召天された森田進氏(詩人、前日本側代表)と、同年九月に召天された李盤氏(劇作家)のために、黙禱が捧げられた。二日目午前に行われた主題講演は、古橋昌尚氏(清泉女学院大学教授)による「遠藤周作にみる信仰の認知的パター



日韓の参加者たちと(軽井沢・恵みシャレー前)

三日目午後は、軽井沢町観光の時間が設けられ、日本の文学世界の体験を目的に、軽井沢高原文庫を、さらに、日本におけるキリスト教と文学の歴史紹介ということで、堀辰雄、川端康成の小説に描かれている、聖パウロ教会などを見学した。

その夜、韓国代表団主催の晩餐会が開かれ、心に響く詩の朗読の数々、日本語、韓国語による歌の披露など、予定時間を大幅に超えて、楽しいひとときを過ごした。

ン——悟りの文学、神探求と自己理解の狭間で」、続いて、「日本小説・遠藤周作『深い河』」について、金承哲氏(南山大学教授)「遠藤周作の『深い河』…ある魂の巡礼」、長濱拓磨氏(京都外国語大学教授)「遠藤周作『深い河』論——日本人の心にある基督教」について、午後には、「韓国詩・黄錦燦の詩三篇『蠟燭の火』『灯台守』『きみとぼく』」について、本多寿氏(詩人)「黄錦燦の詩三篇を読む」、孫晋殷氏(詩人、聖潔大学教授)「受肉の詩化と創造撰理を通じた人間関係の回復——黄錦燦の詩三篇」、「日本詩…森田進の詩三篇『夏』『社会人入学』『夜のあの花』」について、梁汪容氏(釜山大学国文学科名誉教授)「韓国に對する理解とイエスの愛、そして天国への望み——森田進の詩三篇」、服部剛氏(詩人)「キリスト教詩人の遺言——森田進氏の詩は、語る」、三日目午前は「韓国小説…金東里『巫女図』」について、兼子盾夫氏(哲学者)「金東里『巫女図』について」、金奉郡氏(カトリック大学国文学科

名誉教授)「『巫女図』と文化的受肉問題」を発表、質疑応答がなされた。主題講演も含め、発表はすべて日本語、韓国語にそれぞれ翻訳され、議論は深まり、予定時間を過ぎることもしばしばであった。

四日目の最終日は日曜日とあって、礼拝の時をもった。「讚美歌21」の韓国の讚美歌「ウリエイウッソン」(四二一番)をそれぞれの言葉で共に讚美した。権ヨセフ牧師(恵泉キリスト教会小平チャペル宣教師)による日本語と韓国語での、マタイによる福音書二二章三五〜四〇節を通しての説教「受肉と和解」、締めくくりに一同祈りを捧げた。その後、各自帰路についた。

振り返って、「文学会議」ゆえ、小説と詩と、盛りだくさんのプログラムだったが、それを実り多きものになしたのは、通訳の方々のお力である。言葉そのものと、その言外にあることの両方を、それぞれの言語で伝えてくださったからである。とりわけ、長時間、通訳をご担当くださった権宅明氏(詩人、韓国側総務担当)には感謝の思いでいっぱいである。

今回、筆者は旧知の柴崎聰氏(日本側代表)のお誘いで、初めてこの会議に参加した。次回は二年後、韓国釜山での開催とうかがった。平和の主が、引き続き文学を通して、日本と韓国の交流を導いてくださるよう祈る。

(さとう・ゆかり)詩人、聖学院大学非常勤講師

「教皇フランシスコ」について学ぶなら ▼この三冊！

有村浩一

(ありむら・こういち・カトリック中央協議会職員)

いよいよ、教皇フランシスコの来日が間近となってきました。日本にローマ教皇がやってくるのは、一九八一年二月に当時の教皇ヨハネ・パウロ二世が訪れて以来、三十八年ぶりのことです。この歴史的イベントを前に、教皇になって以降のフランシスコを知るための三冊を紹介します。

教皇フランシスコ『ラウダート・シ』

まず、教皇本人の公文書から。教皇フランシスコは就任以来これまで、主な公文書として、二つの回勅(全カト

リック教会にあて、信仰生活の指導などを目的とする重要度の高い教書)、四つの使徒的勅告(バチカンでの世界代表司教会議後に、霊的生活の特定の面に関し、進歩するよう励ます勅告)を発表しています。二〇一五年発布の『ラウダート・シ』は二番目の回勅ですが、最初の回勅、『信仰の光』が前教皇ベネディクト十六世から引き継いで完成させたものであることを考えると、本回勅こそ、教皇フランシスコが最初に取り上げるべき主題だったので

て勧めを具体化するよう教皇は呼びかけています。これは「責任」が各所で強調されていることも関係があり、良心に基づく各自の判断を尊重する、教皇の倫理的アプローチの特徴が現れています。したがって、画一的な理想論を述べているのではなく、「皆が共に暮らす家」の兄弟姉妹として、共通善のために連帯していく必要性を唱えています。

今回の教皇来日テーマ「すべてのいのちを守るため」は、本回勅巻末に収められている「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」から取られています。教皇を迎える準備のためにもなる一冊です。

森 一弘『教皇フランシスコ』

次に、東京教区の森一弘名誉司教が、教皇フランシスコの発言の真意や背景などを丁寧に解説している一冊。これは、『家庭の友』誌に二〇一七年三月か

ら二〇一八年十二月まで連載された記事をまとめたもので、主に、二〇一五年十二月から二〇一六年十一月の「いくつかしみの特別聖年」、二〇一三年に発布された使徒的勅告『福音の喜び』、二〇一六年に発布された使徒的勅告『愛のよろこび』について解説し、最後に、上記『ラウダート・シ』にも触れています。特別聖年中のさまざまな発言や、これら公文書における教皇のことばから、その言わんとすることや人となりや森司教は解説し、興味深く、分かりやすいものです。

まず際立つのは、教皇の姿勢は「先に教会ありき」でも『先に教義ありき』でもなく……『先に人ありき』などである(三四頁)という点です。「教え」の厳格さに固執し、「裁く教会」に陥りがちな現代教会に対して、もっとも助けを必要とする人々のためにある、その人たちとともに歩む教会であるこ

しょう。

そこで扱われているのはエコロジーの問題で、大気や海洋などの汚染、生物多様性の喪失、地球温暖化や人類の使い捨て文化の問題など、人間の活動が被造界全体に与える影響について論じています。しかし単に「自然を大切に」という議論ではなく、環境問題が、平和、貧困・正義の課題といかに密接な関係性にあるかを訴え、それに包括的に取り組む「総合的エコロジー」(第四章)を呼びかけています。「大地の叫びと貧しい人の叫びの双方に耳を傾ける」(四六頁)ことが前提になっているのです。「貧しい人々の優先」は本回勅の根本精神です。

環境、正義、平和についてさまざまな勧めが述べられていますが、それらを「提案」としてあるところがポイントで、「教え」を強要する代わりに、現場の状況と人々との「対話」を通じ

とを繰り返し訴えている、と述べています。これは、結婚離婚の問題を扱っている『愛のよろこび』でもたびたび語られていることです。教会は「傷を負った人々に気を配る野戦病院のようになければならない」(三三三頁)という有名な教皇のことばも、これを裏付けています。こうした姿勢の背景には、教皇がアルゼンチンにいた間に経験した、現場での司牧体験、とくにスラムなどの貧しい人々とのかわりが土台となっていると記しています。

こうした姿勢は、教皇がその住まいをバチカン宮殿内ではなく、バチカン勤務の他の聖職者や来訪者が宿泊する聖マルタの家に定めたことや、教皇専用車から防弾ガラスを取り払ったこと、聖木曜日に行われる「洗足式」をローマ市内の少年院で行い、非キリスト者や女性の足も洗ったことなど、豊かなエピソードにも現れています。

現在の「病んだ教会」(六六頁)を、生き生きとした奉仕する教会へと改革しなければならぬという訴えを繰り返していることも強調しています。こうしたことは教会権威への痛烈な批判となり、反発する伝統的聖職者も多いわけですが、一方で、こうしたことばに信徒らが単に溜飲を下げているだけではダメなことも森司教は指摘します。教皇が発する危機感と改革の緊急性はすべての信者が共有すべき呼びかけなのであって、一人ひとりが自分にはなができるか、を教皇は厳しく問うているわけです。

最後に少しだけ触れている『ラウダート・シ』について、面白い指摘があります。この回勅の題名が取られたアシジの聖フランシスコの「太陽の賛歌」は、晩年、苦悩の闇の内に書かれた、ということですが(二六二頁)。その背景を知って同回勅を読むと、また

違った味わいと発見がありそうです。教皇フランシスコ／ドミニック・ヴォルトン『橋をつくるために』

本書は、フランス人社会学者D・ヴォルトンが、二〇一六年から一七年にかけて行った教皇との十二回のインタビューをまとめたものです。原題が『政治と社会』であるように、二人の対話の内容は、戦争、政治、グローバル化、宗教原理主義、移民・難民、諸宗教対話など、現代社会が抱える多岐に渡る諸課題に触れており、これが八つの章にまとめられ、それぞれ関連する教皇の演説二つの抜粋が、対談内容を補う形で付記されています。他方、(残念ながら?)「教会内部の政治的・組織的対立については、ここでは言及されていません」(九頁)。教会改革を断行するなか、孤軍奮闘しているかのような現教皇の苦悩は別の資料に譲ることにして、本書では、カトリック教会の

リーダーとして現代社会に対峙する教皇の姿勢がよく現れています。たとえば、使徒的勅告『愛のよろこび』の「迎え入れ、寄り添い、見極め、受け入れる」(第八章)という鍵概念はその一つの表現でしょう。具体的な箇所をいくつか紹介します。

「戦争」に関する第一章では、教会が政治にコミットすることは「愛徳の最高の形」だと、その重要性が強調され、しかし「党派的政治には関わるべきではない」と、その区別は明確です。「教会は民衆の中に入っていかなければなりません」というのが明快なメッセージとなります。そこには、邦題になっている「橋をつくること」の意義も登場します。「わたしたちは皆移民者です」という「移住者(ゲール)の神学」に言及しているのは印象深いことです。

「伝統」について語る第七章では、禁止事項を押しつけるようなことを止めて、それぞれの場で教会の福音的価値観、たとえば「迎え入れ、寄り添い、見極め、受け入れる」ことを生きたる大切さを訴えています。

人の優先や労働の価値などを訴えても、「コミュニケーションの行き違い」により社会に認識されることの困難さも指摘します。教皇はこれに対し、「決疑論」と呼ばれる罪のリストに照らし

伝統が静的なものではなく、成長し、純化し続けるものであり、伝統と保守主義とは違うことで二人の意見は一致します。しかし社会学者のヴォルトンは、教会の新たな伝統として、貧しい

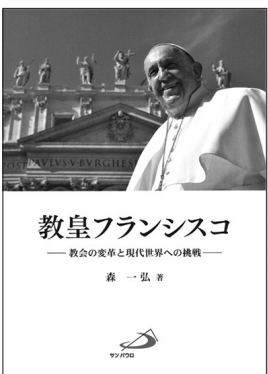
『ラウダート・シ』 ——ともに暮らす家を大切に

教皇フランシスコ：著
瀬本正之、吉川まみ：訳
カトリック中央協議会
2016年刊
四六判 240頁
1400円(税別)



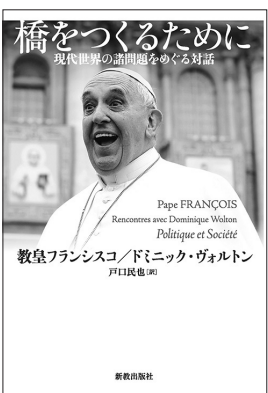
『教皇フランシスコ』 ——教会の変革と現代世界への挑戦

森 一弘：著
サンパウロ
2019年刊
B6判 304頁
1400円(税別)



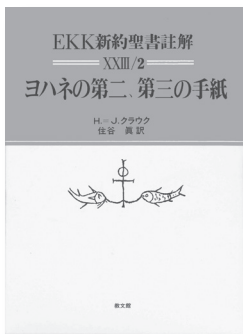
『橋をつくるために』 現代世界の諸問題をめぐる対話

教皇フランシスコ、ドミニック・ヴォルトン：著
戸口民也：訳
新教出版社
2019年刊
四六判 421頁
2600円(税別)



見落とされがちな美しい手紙

〈評者〉三浦 望



EKK新約聖書註解XXIII/2
ヨハネの第二、第三の手紙
H・J・クラウク
住谷 眞訳

本書は、『EKK新約聖書註解XXIII/1 ヨハネの第一の手紙』に続く、ヨハネ書簡研究の泰斗による註解書の日本語訳である。EKK註解書シリーズ (Evangelisch-katholischer Kommentar zum Neuen Testament) は、ドイツ語圏で最初のカトリックとプロテスタント共同による註解書シリーズであり、過去三十年に亘り、学問的精度と神学的思想の深さを両立した註解書として国際的に高い評価を受けている。このシリーズも残すところ、Thomas Soding による『ガラテヤ書』と、Jörg Frey による『エハネ福音書註解』(三冊版) のみとなった。

著者のクラウク氏は、フランシスコ会司祭であり、EKK註解書シリーズを創始したルドルフ・シュナツケンブルクの高弟でもある。ヴェルツブルク大学、ミュンヘン大学新約聖書および初期キリスト教文学教授、シカゴ大学神学

の手紙が欠落していたとしても、誰かが気づくまで数年かかるかもしれない」と書いていた。第二、第三ヨハネもこれに近いものがある。

しかし、クラウク氏も述べている通り、二つの手紙は「独特の魅力」を持ち、ヨハネ共同体の現実を垣間見せてくれる貴重な資料となっている。特に、ヨハネの第三の手紙は、パウロ書簡のフイレモンへの手紙に匹敵するような美しい手紙でもある。共同体の困難な状況の中でも、友愛・愛の重要性を静かに説く「長老」の人柄は心に沁みる。それは、現代の教会にも深い洞察を与えてくれる。本註解書は、短い文章の中に秘められた深い意図を見事に浮き彫りにし、読者にその尽きない魅力を詳説してくれる。二つの手紙だけを取り挙げた註解書は、一九八六年に刊行され

部新約学教授を経て、二〇一六年同神学部名誉教授となった。新約聖書以外でも、外典諸文書やギリシア・ローマ世界の宗教的・社会的な歴史に関する研究など、膨大な学問的業績を持つ。ドイツ語の著作は既に七か国語に翻訳されており、邦訳は、他にも『初期キリスト教の宗教的背景 古代ギリシア・ローマの宗教世界』(上・下巻、日本キリスト教団出版局、二〇一七/二〇一九年) がある。

「神は愛である」(Iヨハ4:8) は、よく知られている聖書箇所であり、ヨハネの第一の手紙は、典札(礼拝)でも頻繁に朗読される。しかし、ヨハネの第二、第三の手紙となると、余程の興味関心がない限り、信徒がこれに読み親しむ機会はほとんどないかもしれない。同じ公同書簡にあるユダの手紙の註解書を著した David deSilva という研究者は、そのまえがきで、「新たに出版された聖書でユダ

た Judith M. Lieu の著作以来であるが、手紙を緻密に分析し、その影響史を古代から現代まで徹底的に網羅している点で、近年刊行されたヨハネ書簡の註解書としては、これに並ぶものは他にはないだろう。

二つの手紙が、クラウク氏にとって「親しい伴侶」のようになつたのと同様に、住谷氏にとっても「親しい『伴侶』また『友』のような存在」となったという「訳者あとがき」からは、三十年余をかけて二冊の註解書に真摯に向き合い、丁寧に翻訳してくださった住谷氏の万感の想いが溢れている。その誠実な歳月に心から敬意を表したい。そして、ヨハネの手紙の魅力が広く日本の読者に伝わることを願ってやまない。(みうら・のぞみ 聖心会、カトリック修道女)

(A5判・二八八頁・本体六〇〇〇円+税・教文館)

敵への報復を訴えることばは果たして祈りなのか



復讐の詩編をどう読むか

E・ツェンガー
佐久間 勲訳

「詩編」を読む人が一度はつまずき、問いを覚える「敵への報復を願うことば」。詩編の歌い手が置かれていた時代や状況、テキストの分析を通して、著名な旧約聖書学者がそれらに挑む。礼拝や典札においてこれらの詩編を実際に祈るための提案もなされる。

◆A5判上製・216頁・3960円

好評発売中

目次

「復讐の詩編をどう読むか」に寄せて……小泉 健

- 序言
- 1章 多面的な問題
- 2章 採用できない解決法
- 3章 復讐の詩編自体に目を向ける
- 4章 敵に関する詩編・復讐の詩編の解釈
- 5章 実践のための帰結

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp (価格10%税込)
<http://bp-ucci.jp>

十字架を背負って
この世界に立つ

〈評者〉藤本 満



贖罪信仰の社会的影響
旧約から現代の人権法制化へ
青山学院大学総合研究所キリスト教
文化研究部編

「あらまあ、なんて難しそうな本！」

それが、本書のカバーを見て、思わず妻の口から出た言葉だった。ところが序文を読むと、書物の題名が、まさに本書の狙い所と意義そのものであることがわかる。贖罪こそが福音の真中心である。しかし、二〇世紀の神学者・聖書学者は、この単純なキリストの十字架のメッセージを嫌った。こうして、贖罪の恵みにあずかった信仰者と、神学・聖書学という学問の世界との隔たりが生まれたのではないかと。

さらに、近代の歴史の中で、キリスト教が民主主義、資本主義、人権等に寄与したことは明らかであるにもかかわらず、その中心メッセージである贖罪信仰の視点からこれらの社会的テーマを語る者はなかなか出てこない。本書は、キリスト教の社会への影響の中でも、特に人権の法制化に

至る道筋を贖罪信仰の観点から見据えようとする意欲的な試みである。

論文は八本掲載されている。その中から評者が個人的に注目した諸点を列挙するが、各論文の優れた洞察と念入りの研究成果に触れるためには、本書全体に直接触れる以外はない。

第一章「苦難のメシアと共同体」（大島力）は、イザヤ書五三章の「苦難の僕」の周りに作られる「共同体」に注目している。贖われるのは「多くの人々」（五三・一一―一二）であり、多くの諸国民（五二・一五）である。やがて彼らは「主の僕たち」（六五章に頻出）となり、民族的枠組みを超えた共同体となり、贖罪の意義を生きる者たちとなる。

第三章は、宗教改革五百年の記念に招かれたH・M・バルト氏の講演「ルターの十字架の神学の今日的意義」である。第四章「一七世紀イングランド・ピューリタンの贖罪理解」（須田拓）は、歴史において完結した贖罪が今を生きる個人に適用される際、この時代の神学者たちが「選び」「信仰」「聖霊」を論じた様子を分析している。今年はドルトレヒト会議四百周年であることもあり、一層、評者の興味を惹いた。

第五章「人権法制化に与えた信仰復興運動の影響」（森島豊）は、人権の法制化を新しい切り口から説得力をもって論じている。人権思想は抵抗権に生まれ、信教の自由を求めてアメリカに渡り、やがて「ヴァージニア州憲法」「独

立宣言」に織り込まれて、法制化されていくことは、ある程度知られている。しかしこの論文は、法制化を押し進めた人々が理神論の影響を受けていて、宗教的関心の乏しい人々であったことを明らかにしている。その上で、人権法制化の真の動力となったのは、信仰復興運動の説教者たち、そして神の愛を体験した人々ではないかと。さらに、身分や地位、性別や教育の有無にかかわらず、神によって創造され、愛されている人の価値と意義を説いていくこの信仰復興運動は、英国議会で奴隷売買禁止運動を展開するウィリアム・ウィルバーフォースを生み出すのだ。まさに、贖罪信仰の社会的影響である。

第七章「日本におけるキリスト教人権思想の影響と課題」（森島豊）では、米国の人権思想の影響を受けた自由民権運動が、その後、日本の土壌に根を下ろすことができなかったのは、受け皿が育たず、人権思想が浸透せず、時代ごとに断絶していたからであると。キリスト教学校の教育に対する期待と責任は大きい。社会的影響力を持ち、また、教会と社会の架け橋となり得るキリスト教学校の使命が明らかにされる。（ふじもと・みつる『インマヌエル高津教会牧師』

（四六判・二四二頁・本体二〇〇円＋税・教文館）

在宅医療現場の挑戦から 示される明日への希望

〈評者〉市川一宏



ひとりでも最後まで自宅で
森 清著

六五歳以上の者のいる世帯（高齢者世帯）は、平成二八（二〇一六）年現在、世帯数二四一六万五千世帯であり、全世帯約五千万の四八・四％を占めている。その中でも、ひとり暮らし世帯と老人夫婦のみ世帯は、高齢者世帯の過半数を超え、ひとり暮らし世帯の割合が今後も増加することが予想されている。このような状況にあって、本書が書かれた意義は大きい。

東大和市にある東大和ホームケアクリニックの院長である著者は、日頃の診療を通して、時には喜び、悲しみ、葛藤し、学んだことから、ひとり暮らし高齢者自身の生きていく術、家族の関わり、在宅医療を通して関わった社会福祉等関係者への期待と支援方法を述べる。多数の事例も紹介され、当事者から専門職まで、対象は幅広く、たくさんの方のヒントが得られるであろう。以下、私が共感したいくつか

の視点を述べたい。

第一に、可能性と課題。それぞれの人生、家族や地域との繋がり、健康状態、日常生活自立能力の程度等の違いから、「ひとり暮らし」の仕組みの深みを強調していることである。これが著者の日々の挑戦である。

第二に、大切にしているもの。それは、「本人が意識していても、意識しなくても、誰にも存在する」と指摘している。いかなる状態にあっても、生きている誇り、明日への希望をもつことができるよう、一緒に探す過程が本書の随所に述べられている。過去の思い出しかり、家族や友人との関わりしかり。また支援者しかり。人生の最後にあっても、大切にしているもの探しは終わることがない。

第三に、「ひとり暮らしを続ける条件。」どこまで「ひとり」で生きていくかを決める「ための一つの目安として、トイの当事者の挑戦である。他方「孤立無援になっっている、「見守り隊」の死角に入る、他人が関わることを強く嫌がる」たくさんの方々がおられ、「孤立死」の増加が心配される。しかし、私は、孤独は避けられないが、孤立は避けることができると考えている。だからこそ、共生社会の実現を目指したたくさんの方の活動が展開されている。

著者は、病気になる「ひとり暮らし」を病人として扱うのではなく、ひとりの人間、生活者であることを目指し、一つの結論に達している。それが、ひとり暮らしの希望をかなえる「連携」である。しかし、幅広く書かれた指摘に濃淡があり、私は惜しいと感じられた。連携を通して、本著に書かれたことをより深めて頂きたい。

悲しみや痛みを感じ、喜びや感動する心を抱き、自分らしく生きたいと葛藤し、人間としての誇りを生きた糧とし、安心する心の拠り所を求めさまよう、そうした人生を一步一歩積み重ねて生き抜いてきた利用者の「生きる」姿に共感すること。私は本書から、そのことを教えられた。

（いちかわ・かずひろ 〓 ルーテル学院大学学長）

（B6判・一八六頁・本体二三〇〇円＋税・教文館）

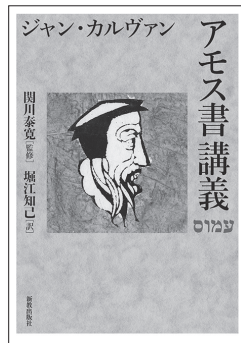
レに行くことができること、呼吸苦に直面していないこと、周囲の理解、サービスや施設等利用をあげている。なかでも、ひとりを貫くために必要な準備として、「頭ではなく気持ちで理解してもらえよう」「本人の強くて明確な希望」が必要であることを述べており、興味深い。

第四に、知恵と支援。元気なうちは、「ひとりで生きる」ことは比較的容易であろう。しかし不可避に訪れる老いによって、生活能力の低下が顕著となる。それに備えて、元気なうちに財産管理、介護を必要になった時に支援してくれる機関や人材、自らの意思に沿った葬儀と埋葬される墓を明らかにしておくことが大切だとし、情報をまとめておき、参考になる。

エリクソンは、高齢期を、心身の機能の低下、役割の喪失、死の恐怖という人生の課題に直面する喪失の時代と言った。生活の危機、名誉を失う心の危機、希望を失うという存在の危機が顕在化する。家族も多くの葛藤の中にある。だからこそ著者は、ひとり暮らしになっても、いやひとり暮らしだからこそ、孤立せず、大切な存在と認められること、実感できることが大切とし、「さびしさ」を和らげる方法等の知恵を示している。これは「ひとり暮らし」

改革者の肉声が 聞こえてくるような講義録

〈評者〉 小友 聡



アモス書講義
ジャン・カルヴァン著
関川泰寛監修、堀江知己訳

カルヴァンの『アモス書講義』の翻訳が出ました。カルヴァンの聖書注解ではなく、「講義録」の翻訳です。本邦初訳であり、評者は時間を忘れて読みふけりました。

これは一五五九年、開設直後のジュネーブ大学で宗教改革者カルヴァンが連続で講義したものが講義録として出版されたものです。ドイツではアウグスブルク講和でルター派が公認された直後であり、日本ではザビエルによるキリスト教伝道開始の一〇年後です。カルヴァンの講義は隔週で行われ、月火水の週三度、午後一時間ほどだったとか。毎回、なんと一〇〇人以上の学生がこの講義を聴いたそうです。講義のライブ感が伝わってくるような部分があります。たとえば、三章一二節の講義では、「昨日、私は一つ忘れていました。頭痛が酷く、聖書をよく眺めることができなかつたからです」とカルヴァンは呟きます。カル

ヴァンの体調不良がわかり、この講義を生で聴いているような不思議な感動を読者は味わいます。毎回の講義の締め括りでは、カルヴァンは祈りを捧げます。その祈りの言葉を辿ると、旧約アモスの預言からキリストの福音を聞き取るうとする講義者カルヴァンの思いが伝わって来ます。


この講義から、カルヴァンが旧約聖書のヘブライ語を理解していることがよくわかります。と同時に、一六世紀の旧約聖書学の水準もわかります。預言者アモスは紀元前八世紀、北王国ヤロブアム二世の時代にユダ王国で預言しました。カルヴァンはその歴史性をきちんと踏まえ、一節一節、聖書のテキストに即して解説します。今日、常識となっているアモス書の編集という識見はまだありませんが、具体的な時代状況からアモスの預言の意味が丁寧に説かれます。今日そのまま語られても十分に理解しうる内容です。

面白いのは、解説の中にカルヴァンの時代状況がしばしば顔を出すことです。宗教改革が始まってまだ四〇年という頃。アモスの審判預言は歴史的には北王国に向けられています。その批判の矛先は、カルヴァンが敵視する「教皇主義者」に重ねられます。たとえば、七章一〇節以下の段落。祭司アマツヤはアモスに対し、「お前の故郷ユダに帰れ」「ベテルで預言するな」と罵倒します。カルヴァンは、これについてベテルを含む北王国をフランス、イタリア、ヒスパニアに喩え、ユダ王国をドイツに喩えます。カルヴァンによれば、祭司アマツヤは「教皇主義者」であって、その見解は宗教改革運動の否定！として捉えられます。つまりアモスに向けられた「ユダへ帰れ」は、宗教改革運動をフランスやイタリアに広めず、ドイツに封じ込めよ、と

いう教皇主義者の戦略だとカルヴァンは解釈するのです(二九三頁)。アモスの預言を現代の状況に置き換えて理解するカルヴァンの解釈はインパクトがあります。聖書講義は、聖書を現代において語ることなのか、と納得させられました。

本書は堀江知己牧師の翻訳によるものです。訳文がこなれて読みやすくなっています。関川泰寛先生が監修しておられ、これは学問的に大変すぐれた翻訳書です。このすぐれた翻訳者による『アモス書講義』が多くの牧師や信徒の皆さんに読まれ、カルヴァンの聖書講義の面白さをぜひ味わっていただきたいと心から願っています。

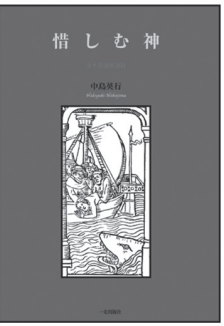
(おとも・さとし) 東京神学大学教授、日本基督教団中村町教会牧師 (A5判・三九〇頁・本体五〇〇〇円+税・新教出版社)



惜しむ神

ヨナ書講解説教


中島英行
Hideyuki Nakajima



竹森満佐一先生への感謝をこめて書き下ろした「ヨナ書講解説教」。

妻ハッセリンク先生ご夫妻を記念してささげる「ハイドルベルク信仰問答第一問による説教」ほか

四六判・並製
定価【本体 1,600 + 税】円
ISBN978-4-86325-119-9

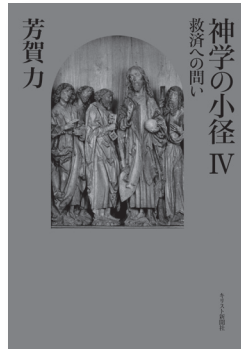


株式会社 **一麦出版社**

札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

喜ばしい教会の物語としての
「救済への問い」

〈評者〉 石井佑二



神学の小径IV

救済への問い

芳賀 力著

著者の芳賀力先生は、『神学の小径I』のあとがきにて、その執筆動機について語っている。ある地方の牧師会で若い牧師から「神学の基礎知識を体系的に整理して提供してほしい。しかも、飽きのこない読み物で、伝道するのに力が出るような……」と言われたそうだ。著者はその求めに、誠実にお応え続けて下さり、その姿勢は本書『神学の小径IV 救済への問い』においても貫かれている。この求めを大胆にも語ってくれた「若い牧師」に感謝したい。

本書は神学者・牧会者として生きる著者の実存と豊富な知識に基づいて、今日の教会が聴くべき言葉が、生き生きとした言葉でまとめられている。

本書は一八章に区分される。最初に、現代において私たちは「救い」を求める、その必要性すら分からない程、罪の中にいると指摘し、二―五章で、捉えるべき罪が如何な

そして第一六―一七章で「信仰義認」と「信仰」について、第一八章で「予定と選び」が、教会が救済を物語る、その内容として示される。著者は「聖霊によってこの方（イエス・キリスト）との人格関係に入れられることこそ我々にとっての救済目標」である、とする。その意味で本書は「キリストの人格」を強調する。そして「キリスト論を原理の問題に抽象化しないためには、それをナラティブという言葉スタイルにおいて叙述するということが必要になる」（二七七頁）とする。この様にして、キリストの人格に対しての問いに答える「その救済論をナラティブという仕方を持つている」ことを自らの特徴とするのが、キリスト教的共同体、教会である、と紐解く（二八二頁）。この教会において、時代の価値観・世界観に染まった私たちの地上

るものであるのかを語る。第六―一二章で、聖書において証言されるメシア待望、キリストの生涯、死と復活、それらにおいて語られる救済の物語（ナラティブ）が、著者の適切な手引きによって筋道を辿って語られる。そして復活までを語った後で、著者は続く第一章で、「受肉」と「先在のキリスト」について語る。この順序でキリスト論を語るのは、著者の「復活が遡って初めからの生涯の秘密を解明する。この復活の持つ遡及力こそ、キリスト論成立の原動力である」（二四五頁）という理解によることである。そこからキリストの人格を語る。この姿勢は、私たちがキリストを物語るそのあり方に、大切な示唆を与える。そうして第一四―一五章で、これらのキリストによる救済は、教会においてイエス・キリストの救いの出来事が物語られてこそ、今の私たちにとって意味をなすものとなる、と示す。

の物語である「前ストーリー」が、聖書の物語・説教による啓示、「原ストーリー」によって示された「根源的現実」と衝突し、回心が求められる。そうしてその者は、その根源的現実に参加し、それを自らの「後ストーリー」として受け止め、神の民の物語を生きる人間となる。そしてその者は啓示の「証言」に生きるようになる（二九〇頁）と言う。私たちはこの教会の物語としての「救済への問い」の言葉に、新しい伝道の力をも得ることが出来るであろう。

本書は著者が神の前で謙遜に「小径」と称する、その神学的思索の旅路を、著者と共に歩む書物である。それは教会の物語としての「救済への問い」を、喜びを持って味わえる旅路である。（いしい・ゆうじ）日本基督教団遠州教会牧師（A5判・四一八頁・本体四三〇〇円＋税・キリスト新聞社）

新刊

【青野太潮先生献呈論文集】

イエスから
初期キリスト教へ
新約思想とその展開
日本新約学会編

FROM JESUS TO EARLY CHRISTIANITY:
NEW TESTAMENT THOUGHTS
AND THEIR DEVELOPMENT

LITHON

【青野太潮先生献呈論文集】

**イエスから
初期キリスト教へ**
新約思想とその展開

日本新約学会 編

●A5判上製 本体5,000円＋税

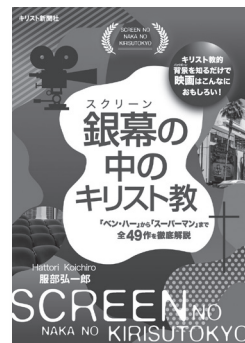
イエスと初期ユダヤ教神秘主義**大貫隆**／イエスの譬えにおける時の造形**廣石望**／クレイア集としてのマルコ福音書**山田耕太**／ルカ福音書におけるサタンの役割**本多峰子**／「愚かな金持ち」は貪欲か**嶺重淑**／ファリサイ派の人と徴税人の祈りの譬の積義的研究**大宮有博**／イエスの胸に横たわる弟子**小林昭博**／パウロにおける聞くことと見ること**原口尚彰**／『慰めの手紙』としてのフィリピ書**伊藤明生**／ルター『九月聖書』の書誌学的考察**辻学**／他8篇を収録。 ISBN978-4-86376-075-2

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

言は映画であった

〈評者〉**沼田和也**



スクリーン
銀幕の中のキリスト教
服部弘一郎著

キリスト教は、その始まりから映画的であった。初めにマルコ監督の作品、次にマタイ監督とルカ監督によるリメイク、そしてヨハネ監督による斬新な新解釈という相貌を持つ。イエスという一人物を、いくつもの物語がいくつもの描写で再話することは、まるで映画の先駆けのようだ。

これまでもアデル・ラインハルツ著、栗原詩子訳『ハリウッド映画と聖書』（みすず書房）や木谷佳楠著『アメリカ映画とキリスト教』（キリスト新聞社）など、アメリカの映画とキリスト教との関係を探る著作があった。本書はよりカジュアルに、DVDコレクターのためのカタログといった感覚で手に取ることのできる一冊だ。しかし内容は前二書と呼応関係にあり、映画をとおしてアメリカ的キリスト教を窺い知れる良書である。

『十誡』や『ベン・ハー』のように、教会のビデオコーナー

の「は日本を含めた世界中の物語作品に、骨組みや肉付けを与え続けているのである。

そういう意味でも第五章にある特別対談「シネマとイエスと、時々、聖書」は映画とキリスト教、というだけでなく、文化、あるいは文化の中で語られる物語（小説や映画からプライベートな「ちよっとい話」まで）に、キリスト教的なものがいかに浸透しているかを具体的に感じさせてくれる。キリスト教徒でなくても、罪責を背負うことや赦されざる者だというステイグマを持つことはある。そういう人間が赦されたと感じること、罪から解放される喜び。それをキリスト教では「キリストによる罪の赦し」として語るが、映画であれば「主人公の葛藤と解放」という物語になるのだ。第二章「イエスのいないキリスト列伝」を讀

いかににも置いていそうな映画が紹介されているかと思えば、一見「これってキリスト教映画なの？」というような例えば『拳銃無宿』や『続・荒野の用心棒』といった「ぶつうの」娯楽作品がキリスト教という視点から分析されている。紹介されているのが映画マニア（シネフィル）好みの難解な作品ではなく、むしろ映画に興味がない人でも「ああ、なんか知ってる」という作品であるのもよい。なかには『ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団』といった、ハリウッドではない映画作品も含まれているところが、最初に紹介した二書とは異なるユニークさを持っている。『ドラえもん』においてはヒロインのリルルが復活するという切り口から、イエスの復活と結びつけた神学的考察がなされる。映画におけるキリスト教はもはやハリウッド（あるいはヨーロッパ）の専有物ではない。キリスト教「的」なもの

めば、キリストというフレーム、あるいはその受難劇が、広く人間ドラマに適用されている様子が窺い知れる。

本書の残響は、紹介されている数々の名作映画をキリスト教的な視点から観直すことにとどまらない。映画は今なお、次々に製作、公開され続けている。それら一つひとつをキリスト教的な視点から観てみる、その作法が本書をとおして明らかになる。いつもキリスト教的に観るという意味ではない。娯楽は娯楽として、あるいは芸術は芸術それ自体として味わえばよい。ただ、もしこれをキリスト教的に観ればどんな相貌が見えるのか。そういう味わいが一つ増えるということである。

（ぬまた・かずや 日本基督教団王子北教会牧師）
（A5判・一四二頁・本体一七〇〇円＋税・キリスト新聞社）



新刊 聖書学論集50

日本聖書学研究所編

●A5判並製 定価3000円＋税

〈講読報告〉

神殿の崩壊—第4エズラ記

上村 静

●
古代ユダヤ教の贖罪と悔い改め

—一心の内と儀礼

市川 裕

●
「お前は彼にとって神となる」
(出4:16)

—古代イスラエルにおける
モーセ像の側面

山吉 智久

●
初期キリスト教における感情

—『ヘルマスの牧者』における
ὀζηχολία (憤怒) を例にとった
方法論的および内容的な諸問題
ペトラ・フォン・ゲミュンデン(廣石望 訳)

●
贖 罪

—新約聖書における救済論的
メタファーの諸相

廣石 望

現代ヘブライ語 における 前置詞の重要性

ヘブライ語の歴史と
発展に関する一考察

アダ タガー・コヘン 著

同志社大学神学部神学研究科教授

●A5判並製 本体3,500円＋税

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

彼らの成長に影響を与えた 心温まる記録!

〈評者〉**角田芳子**



50年以上前からあった「心のノート」
子どもたちと教師の記録
福田節子著

「心のノート」という題名を読んで、どんな印象を持つであろうか。文部科学省の道徳授業のカリキュラムかと思ふ人もいるだろう。しかし、大違いであることにすぐに気づく。これは、千葉県公立小学校で教諭をしていた福田節子先生が、担任した子どもたちとやり取りしていた心温まる記録である。家族や友達との交わりで感じた喜び、時には理解されない悩みや悲しみを正直に作文によって訴えた作品である。学年が上がるにつれ悩みも深まっていく、そのような時、福田先生はどのように返事を書かれたのだろう。クリスチャンである先生は魂をこめて、対応されたのではなからうか。聖書から聞く御言葉に裏付けられていたのではと、想像する。かく言う私も、約四十年間、私立小学校で教壇に立っていたので、その辺りのことは、手に取るようにわかる。

先生からの返事を読み、どんなにか子どもたちは励まされ、新しい視点を与えられたでしょう。担任が子どもと心を繋ぐには、文章を通しての方法は、「心その児童の存在」に触れることが出来、とても良い方法である。しかし、良いと認識していても激務ゆえに毎日の返事さえ書けない現実もある。週何回でもよい、「先生は分かってくれている。」というやり取りができるならば、素晴らしいではないか。私が現在関わっている子どもたちも、大切に何度も担任からの返事を読んでいるのを目の当たりにし、驚くことがしばしばである。現在では、学校現場にコンピュータが入り、違った意味で子どもたちの「心の有様」を評価しなくてはならなくなってしまう。しかし、このような時代であるからこそ、本物の先生を求めているのではないか。

福田先生も真剣に、子どもたちに接した幸せな教師だと

思う。それだからこそ、慕われ、卒業した後も連絡を取り合い、家にまで招き、交流しているのであろう。成人したあかつきには、喜びあい、飲食を共にしているのである。二〇一七年には、卒業生が還暦・先生が喜寿の祝いを千葉駅近くのソバ屋を借り切ったそうである。何ともうらやましい光景ではないか。その時にも、話題の中心は、「心のノート」の事であるようだ。そこから、クラスの様子が見え、語っても語りつくせない思い出が展開されたのである。「鬼のパンツ」を歌った時の先生の面白い表情、本の読み聞かせをしてくださった感動。それらの経験は、その後の彼らの成長に影響を与えたのである。歌声と笑い声が聞こえてきそうである。そのような雰囲気の中で、福田先生も多忙だが、教師を続けようとするエネルギーを

えられたと記している。

私が着任した当時も、同じような様子であった。そして、最初に担任した三年生の子どもたちは、間もなく還暦を迎えようとしている。あの日から五十年が経過し、一年に数回食事をして、現在の様子を語り合うという幸いを受けている。しかし、今は、「いじめ」や「不登校」という言葉が、日本中に満ちている。大人の世界でも「引きこもり」が当たり前のようになり、不寛容な社会になっている。当たり前の教育界に戻るためにも、原点であるこの著書をお読みになることを、皆さまにお勧めしたい。

(つのだ・よしこ 元聖学院小学校教諭、教頭)
(四六判・三七六頁・本体一八〇〇円＋税・ヨベル)

ヨベルの新刊案内

神の狂おしいほどの愛
大塚教諭執筆 松島雄一メッセージ集
正教会一年間の教会暦に沿って語られる言葉が、すべての人を福音的な霊性へと開花させる。聖体礼儀体験が手で触れるように分かるようになっている。47の説教&論考を収録。
新書判 二五六頁・二二〇〇円

渡辺善太著作選④ 善太先生「聖霊論」を語る
巻頭論者：聖霊の吹いた「跡」をたどる 大貫隆
縦横に語りかけた翁晩年の珠玉稿、遂に復刊！
[第8回配本・ヨベル新書055]
新書判・208頁・1,800円

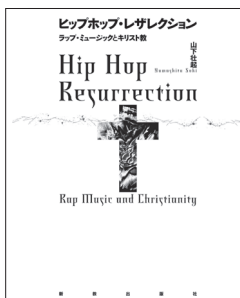
日キ教団西仙台教会 牧師・臨床心理士 **早坂文彦**
ACTによるパストラル・カウンセリング入門 [理論編]
「感情はコントロールしないですっかり味わう……」救いのある癒やしは何処に!? 心理療法ACTを用いたその全貌とは?
四六判・256頁・2,500円

菅原吉英 写真・文
エマのクリスマス
〈お話し聞かせてサンタさん〉
好奇心旺盛な5歳の女の子「エマちゃん」が語りかけます。いろいろなサンタさんが登場するよ。教会、CSの祝いで使えて、楽しめる絵本。制作図解付き。
好評発売中! 46判上製・1,100円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税別)

異色の歴史神学にして ヒップホップ研究の新古典

〈評者〉福山裕紀子



ヒップホップ・レザレクション
ラップ・ミュージックとキリスト教
山下壮起著

読後はまるで、超大作のV. A. (various artists) を聴いたかのようなだった。「音楽において描き出される生の現実とそこに意味を見出そうとする」(一三頁) ヒップホップのエネルギーが、この一冊に充滿している。

日本でも一般的には消極的なイメージを持たれている音楽文化「ヒップホップ」。本稿は、およそそのイメージからは導き出されないヒップホップの「宗教的機能」を論じていると言つて良い。第3章では、黒人神学の祖ジェームズ・H・コーンの理論を継承しながら、「隔離政策撤廃後に育つた最初の世代」(二五頁)であるヒップホップ世代の作品が分析されている。コーンは『黒人霊歌とブルース』(新教出版社、一九九八年)で、ブルースは奴隷制廃止後のアメリカ社会の問題を映し出した世俗的霊歌だと論じた。

肯定される。それは教会には語れない救済論である。
⑤死が身近なインナーシティの生活で犠牲になった、無名の友の名を楽曲であげ悼む中で、ラッパーたちは神の存在や天国を語る。

第4章はその原因をアフリカ系アメリカ人に意識されてきた「二重意識」に基づく「弁証法的緊張状態」に見る。西洋的な聖俗二項対立の構造が黒人教会に波及した結果、聖俗の混在するアフリカ性、宗教観は排除されてきた。しかし、一方でアフリカ性は、教会の外に継承されてもいる。その一つが「アフリカ宗教伝統や神話に登場する人間と神との仲保者としての霊的存在」(一九三頁)であり、聖俗を自由に行き来する「トリックスター」だ。トリックスターは「通常の社会規範から見ると悪とされる行為を強者にしかけることで、不平等な力関係や弱者の置かれた立場を明らかにする」(一九二頁)ものである。そして著者は、ラッパーも「トリックスター」と同じ機能を持つというのだ。「反社会的な事柄をラップするラッパーが聖なる事柄に言及し、破滅的な生き方についてラップする者が救いを求めることは、既存の聖と俗の境界線に挑戦するものである」(一九四頁)。

著者の山下壮起氏は並々ならぬヒップホップ・ヘッズなのだろ。ヒップホップに馴染みがない読者も想定し、い

同様に、ヒップホップも公民権運動以降の時代の世俗的霊歌としての機能を持つが、ブルースとの差異を含めそこには五つの特色と類型があるという。

- ①ブルースは聖書に懐疑的になったが、ヒップホップは現実に基づき聖書やキリスト教イメージの再解釈を行う。
- ②アフリカ系アメリカ人の苦難が反映された「ストーリー」、つまり現世に「天国」が見出される。そのことは、ヒップホップという言説空間において神学的議論が生じていることを示す。
- ③アフリカ系アメリカ人の若者が被る不条理な現実を、ラップは「徹底した正直」をもって描く。それは神との徹底した対話であり、神義論である。
- ④地獄のような現実の中で悪事もなさねばならない葛藤が正直に歌われ、いかなる手段を用いても生存することが

くつかの仕掛けが設けられている。脚註欄には引用された作品のCDジャケットが掲載されている。また、ボーナストラックと称して補章「ヒップホップという言語」があり、「アフリカ系アメリカ人の生のさまざまな側面から生み出されたヴァナキュラー」(二二七頁)としてヒップホップが論じられている。本論の合間には「間奏曲」として、氏の留学時代の経験に基づいたコラムも記され、本稿をより立体的に理解するのに役立つ。装丁にもヒップホップへの愛とリスペクトが感じられ、ヒップホップが対話空間として存在するという氏の論旨が最大限表現されている。

日本でも神学や教会の外にあると思われているヒップホップを神学の用語へと翻訳した点で、本書の功績は大きい。ただ、ヒップホップを聖俗の対話空間としていくためには、神学用語をさらに翻訳していくことも今後必要となるだろう。その役割は、著者だけでなく我々にも開かれている。

「トリックスター」はそこかしこにいるのだが、教会はいつ気付くのだろうか。凝り固まった思考から離れ、本書を片手にヒップホップヘッズ・神学者・教会関係者の対話が始まることを願う。

(ふくやま・ゆきこ) 日本キリスト教団会津若松教会牧師
(A5判変型・二六四頁・本体三三〇円＋税・新教出版社)

鍊達の牧師が、自らを重ねて 詩編の嘆きと賛美を味読する

〈評者〉 小倉義明



詩編を読む 上
嘆きは喜びの朝へ
広田叔弘著

本書は書名が示すように、『詩編』を味読しようという著者の招きの言葉である。上・下二巻のうちの上巻で（下巻も既刊）、詩一〜六九編から選ばれた詩文が取り上げられている。これらはもとキリスト教放送局FEBBCから放送された原稿に加筆したものと、著者は序文で述べている。このことは、本書の性格を特長づけていると言えよう。即ち、語り手が聴き手に向かって語りかけた奨励という性格だ。評者は本書を読みつつ、次第に自分が耳をそばだせているのを感じさせられた。

著者は二五年余牧会に従事し、また前記FEBBCやキリスト教学校の講師・理事として奉仕する鍊達の牧師。その優れた資質と経験が、余すところなく注ぎ込まれている。

著者の詩編（更に、引用する旧・新約各書からの聖句）に向き合う姿勢は、序文とあとがきに明確に述べられている。

のであり得ず、罪に対する硬質な認識にまで肉迫している。第五一編の詩人の絶望にまで降りた著者は、続けて言うのだ。「私たちは、ここで新約聖書を開きたいと思えます。打ちのめされた男がいます」。使徒パウロのことだ。パウロが生きる望みをさえ失い、死を覚悟するほどであったが、その只中でキリストに依り頼んで立ち上がった事実と言及する。キリストの十字架は神の赦しの愛の証しであり、その前には罪も死も敵し得ない！ ここには嘆きから喜びへの（ひるがえり）が起こっている。聖書信仰は本質的にこの（ひるがえり）を持つものだが、本書には詩人の絶望を読み取りつつ、そこから新約の福音を訴求する構造が、鮮やかに、首尾一貫しているのが見られる。著者はその福音に一途に依り頼み、それをひたむきに語る。

著者は「詩編の祈りは賛美と嘆きの二つに収斂する」という著名な旧約学者の言葉を受け留めている（5頁）。とりわけ著者は、人生の苦難と世界の不条理を訴える詩人たちの嘆きに、激しく共鳴する。著者のその鋭敏な感受性に読者は心を打たれるであろう。人間の苦悩は、しかし、そうした外的な困窮のレベルに止まるものではない、と著者は見る。例えば、姦淫の罪を犯したダビデの悔いを詠んだ五一編の読みの中で、著者はこう述べている（198〜203頁）。「問題は自分の外にあるのではなく、私そのものが問題なのです。……詩人は、自分の罪をダビデとバト・シエバの事件に重ねます。欲望とエゴ。……これは、どん詰まりの言葉です。詩人は人間の悔い改めさえ信じていません。……詩人は自分を含めた人間に対して絶望しています」。詩人の（従って、著者の）嘆きはセンチメンタルなもの

聖書学の知見を踏まえていながら、それをもって粉飾することなく、テキストに固着してビートルクンデのように語る。時折り著者自身の切実な体験が語られるが、それは告白的な証しとさうべく、評者はそこに真実さを見た。

本書に歴史や文化の神学の視点が加わったらどう響くだろうか、という興味も湧いてくるのだが、「十字架につけられたキリスト以外は何をも知るまい」と決意し、「私は、主キリストに対する操を一生とおして守りたいのです」と言う醇乎たる信仰（185頁）の前には、脱帽するしかない。信徒・求道者の方々にはもちろん、伝道者たちにもぜひお奨めしたい一書である。

（おぐら・よしあき）前日本基督教団使徒教会牧師
（四六判・二二四頁・本体二〇〇〇円＋税、日本キリスト教団出版局）

十字架の光の中で詩編の言葉を
聴きたい—FEBBC番組を単行本化



詩編を読むもう

全2巻

嘆きは喜びの朝へ ひとすじの心を 広田叔弘

詩編を読む「旅」のガイドブック。詩編と新約聖書と現代世界を自由に往還しつつ、詩編を読む喜びに私たちを招く。詩編のメッセージを汲み取るのは難しいと思う方にお勧め。各巻 四六判並製・224頁・本体2000円＋税

上巻で取り上げる詩 ▶ 第1編、第2編、第6編、第8編、第14編、第19編、第22編、第23編、第30編、第37編、第42編、第43編、第44編、第45編、第51編、第69編

下巻で取り上げる詩 ▶ 第70編、第72編、第80編、第86編、第87編、第88編、第90編、第95編、第96編、第100編、第115編、第118編、第119編、第121編、第127編、第130編、第133編、第137編、第143編、第150編

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp (価格税別)
<http://bp-ucci.jp>

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zeninkan_syoten_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fqcwks524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新中延町2-2 様々クリスチャンセンター	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7.biglobe.ne.jp/~yohatare-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshita.coocan.jp/	nagoya-seibunshita@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環読道字線777 沖縄キリスト教館内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※ 一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

著者が牧師を務める歌舞伎町裏にある教会には、詐欺師、ホステス、酔っ払いなど、様々な人が訪れる。そうした人々

関野和寛著

——歌舞伎町の裏からゴッドプレス!

四六判・120頁・本体1200円

神の祝福をあなたに。

仰の先達たちによる祈りを掲載。

一年でもっとも闇が深く、寒さが厳しい時に迎えるクリスマス。主を待ち望むこの日々を、御言葉に聴きつつ、祈りをもって過ごすための書。待降節第一主日から一月六日の公現日まで、毎日読める御言葉とショートメッセージ、信仰の先達たちによる祈りを掲載。

小泉 健著

主イエスは近い クリスマスを迎える黙想と祈り

A4判・上製・26頁・本体1200円

INFORMATION

近刊情報

の本音を聞き、その誰にも平等に「神の祝福」を届けたエピソードを30本収録。月刊新聞「こころの友」好評連載を単行本化。プレゼントにも最適。

四六判・88頁・本体1000円

■日本キリスト教団出版局 マンガ絵本 聖書ものがたりクリスマス

金斗鉦／具本暉作

ローマ帝国とヘロデ大王の支配に苦しみ、救い主を待ちわびていたユダヤの民。ある日、エルサレム神殿やガリラヤのナザレ村で、不思議なことが起こり……。聖書全体のストーリーを見据え、綿密な考証を基に描く、世界ではじめてのクリスマスの出来事。

■新教出版社

第二コリント書 10章―13章【現代新約注解全書】

佐竹 明著

著者のライフワークである第二コリント注解の第2回配本。前巻(8―9章)に引き続き、いよいよ書簡の締めくくりに向かう重要な個所に、詳細を極めた分析を施す。今回は1章から7章まで。

A5判・658頁・本体予価9500円

■教文館

古代イスラエル宗教史

——先史時代からユダヤ教・キリスト教の成立まで

M・テイリー、W・ツヴィッケル著／山我哲雄訳

パレスチナの定住集落の出現から、キリスト教とラビ・ユダヤ教の萌芽まで、考古学とテキスト史資料の両面から二人の専門家が貴重な洞察を提供する。

A5判・336頁・本体4200円

福音と世界

2019年11月号

特集 天皇制を拒否するために

寄稿者 守中高明、小泉義之、牟田和恵

綿野恵太、太田昌国、友常勉

好評連載

パピロンの路上の Commentaries of a God of a Preacher Man (ムニエル・ヤン)、神の酒 (石井光太)、教父学入門 (土井健司)、わたしはロックがわからない (山口政隆)、遺跡が語る聖書の世界 (長谷川修二)、福音書記者たちの饗宴 (松本あずさ)、レヴィナスの時間論 (内田樹) ほか

A5判・本体 588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

若松英輔さんが八月十一日付けの日経新聞で書いていた。「死者は生者を守護する。それが先祖という存在の根底にある」と民俗学者の柳田國男が『先祖の話』で書いている。ここでの死者は単に亡くなった人を指すのではない。姿は見えず、その声も聞こえることはないのだが、確かに存在すると感じられる、いわば『生きている他者』だ。

ちょうど今夏読んだソナリ・デラニヤガラ『波』(新潮社)を思い出した。教会員の方が教えてくださった一冊。私をよく知る方の推薦だけに、確かに私の求める本で、ページを繰る指は止まらず、いつきに読み終えた。

予告

本のひろば

2019年12月号

本・批評と紹介

(特集)「LGBT」を学ぶならこの三冊!、(エッセイ)新井 明著『新井 明選集「全三巻」』(書評)近藤勝彦著『死のただ中にある命』、エマニエル・カトンブレ/クリス・ライス著『すべてのもとの和解』他

著者はスリランカ出身。ケンブリッジ大学に学び、ロンドン大学で教鞭をとっている。夫は大学の後輩だった。

二〇〇四年冬、著者の人生を二分する出来事が起こる。夫、幼い二人の息子と共にスリランカに里帰りするのだが、クリスマス翌日、両親も交えて海辺でバカンスを楽しんでいた一家を、大津波が襲ったのだ。助かったのは、著者ひとりだけであった。

死を願う苦しみの淵であえぐ著者に、セラピストはすすめる。失った家族をできるだけ鮮明に思い出し、彼らが生きた証しを書き残すことを。そして本書が生まれた。

まさに『生きている他者』としての『死者』をめぐって書かれた本だと思う。ここに記されたことは、復活の教理とどう結んでいくのだろうか。(土肥)

主は偕ともにあり

田中遵聖じゅんせい説教集

10月25日



田中遵聖「著」／写真家 神藏美子「解説」

直木賞作家田中小実昌の父にして独立教会「アサ会」の牧師だった田中遵聖（一八八五―一九五八）。その自由で無類な福音観を余す所なく示す説教集。長らく入手困難だった貴重な書を復刊。

◆A5判・本体3000円

橋をつくるために

現代世界の諸問題をめぐる対話

教皇 来日



教皇フランシスコ、ドミニック・ヴォルトン／戸口民也訳

戦争、貧困、環境、難民、アイデンティティと伝統、異なる者同士のコミュニケーション、教会のあり方などをめぐり、著名な社会学者が1年間にわたり行なった興味尽きないロングインタビュー。

◆四六判・本体2600円

組織神学 第一巻

待望の邦訳ついに刊行開始

ヴォルフハルト・パネンベルク／佐々木勝彦訳

反響！

キリスト教の真理要求をあくまで保持しつつ、歴史的省察と体系的省察とを絶えず結合し貫徹しようとする批判的・方法的意識に貫かれた精密な叙述。第一巻では組織神学の本質、キリスト教の真理性の意味、そして神論を扱う。全三巻。

◆A5判・本体9000円

アモス書講義

改革者の肉声が聞こえる！

ジャン・カルヴァン／関川泰寛「監修」／堀江知己「訳と解説」

大好評！

ヘブライ語原典を自らラテン語に訳し、逐条的に入念なパラフレーズを行う。創設間もないジュネーブ大学で語られた講義の、ライブ感溢れる記録。

◆A5判・本体5000円

ヒップホップ・レザレクション

ラップ・ミュージックとキリスト教

山下壮起（阿倍野教会牧師）

その深い宗教性に迫った気鋭の神学者による注目作。

◆A5変型判・本体3200円

バルト神学とオランダ改革派教会

危機と再建の時代の神学者たち

石原知弘（東京恩寵教会牧師）

受容史を通して浮かび上がる社会の中の教会と神学の実存。

◆四六判・本体1100円

本
の
ひ
ろ
ば
一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
 二〇一九年一月一日発行 毎月一回一日発行
 第七四三三号 二〇一九年十一月号

マンガ
絵本
聖書
ものがたり

クリスマス



2019年10月7日刊行



きむとろげん
金斗鉉
貝本啓 作

親しみやすいマンガ調のイラストと表現方法で聖書のもがたりを描きおろす好評シリーズ第2弾。綿密な考証を基に、世界ではじめてのクリスマスの出来事を描く。

◆A4判 上製・26頁・1,320円

関野和寛牧師の「ところの友」連載を単行本化

神の祝福を あなたに。

歌舞伎町の裏からゴッドプレス!

関野和寛



2019年10月18日刊行

◆四六判並製・88頁・1100円
 著者が牧師を務める歌舞伎町裏にある教会に訪れる様々な人——詐欺師、ホステス、酔っ払いなどの出会いをユーマラスに語る。プレゼントにも最適。

主を待ち望む日々を、祈りつつ過ごす

主イエスは近い クリスマスを迎える 黙想と祈り

小泉 健



2019年10月15日刊行

◆四六判並製・120頁・1320円
 待降節（アドベント）第1主日から1月6日の公現日まで、毎日読むための御言葉とショートメッセージ、信仰の先達たちによる祈りを掲載。

発行所 〒163-0814 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
 電話03-3366-1161
 発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 佃平河工業社
 電話03-3366-1161
 発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話03-3366-1161

定価七八円(税抜七二円) (¥63円)
 一年分一三〇〇円(送料共)